

# EVENTOLOGY

イベント学会会報「イベントロジー」No.8/2001. Aug.

## CONTENTS

- イベント学会2001年度研究大会  
「新世紀イベントを創造する」  
～飛翔する21世紀イベント～  
開会挨拶/木村 尚三郎 1
- 基調講演「イベントロジーへの途」  
井関 利明 2
- 研究発表1「病院におけるイベントの実態  
と意義」高田 佳子 3
- 研究発表2「『街イベント』の最新傾向と  
その効果的活用事例」後久 博 4
- 研究発表3「ユニバーサルイベントの視  
点」内山 早苗 5
- 研究発表4「グローバルスポーツイベン  
トとスポーツ・ツーリズム」野川 春夫 6
- 研究発表5「行政イベントの構造と課題」  
行政イベント研究会 7
- シンポジウム  
「社会環境の変化がイベントをどう変え  
るか」 8
- Platform「学会員からの声」 10
- 2001年度総会開催 11
- お知らせ 12



2001年度  
研究大会

「新世紀イベントを創造する」  
飛翔する21世紀イベント

イベント学会2001年度研究大会が、6月23日に順天堂大学御茶ノ水校有山記念講堂で開催された。今回のテーマは「新世紀イベントを創造する」。世紀末から続く閉塞感を打破し、活力ある新しい時代へ移行するために、イベントは、人間のあり方をどのように変革できるのか。さまざまな観点からの研究発表がなされた。

### 開会挨拶 イベント学会会長 木村 尚三郎氏

20世紀は新製品、新技術が次々に出てきたので、私たちは、それを買うだけで幸せでしたが、もうその時代は過ぎてしまいました。多少のお金をかけ、暮らしの中で知恵を働かせて幸せになる。あるいは昔のいい知恵、いい暮らしに学んで幸せになる。それが、21世紀の私たちの生活の基本になるのだと思います。そういったものを実現させていく場が「新世紀イベント」ではないでしょうか。



### プログラム 司会：増田 隆昭 研究部会長 会場：順天堂大学 御茶ノ水校 有山記念講堂

10:00	開会挨拶	木村 尚三郎 イベント学会会長
10:10	基調講演	「イベントロジーへの途」 井関 利明 イベント学会副会長/千葉商科大学政策情報学部長
10:50	研究発表1	「病院におけるイベントの実態と意義」 高田 佳子 (株)アートランド代表取締役
11:25	研究発表2	「『街イベント』の最新傾向とその効果的活用事例」～環境・福祉をテーマに注目を集める早稲田商店会～ 後久 博 コーソー戦略研究所所長
13:00	研究発表3	「ユニバーサルイベントの視点」～ユニバーサルデザインを切り口として～ 内山 早苗 (株)内山工房代表取締役
13:35	研究発表4	「グローバルスポーツイベントとスポーツ・ツーリズム」～W杯と欧州サッカー選手権大会に着目して～ 野川 春夫 順天堂大学スポーツ健康科学部教授
14:10	研究発表5	「行政イベントの構造と課題」 行政イベント研究会(森下 慶子、田村 国昭、金田 秀一、中野 彰)
15:00	シンポジウム	『社会環境の変化がイベントをどう変えるか』 コーディネーター：間宮 聡夫 順天堂大学客員教授 松村 広一 関東農政局農村振興課課長補佐 宮本 幸一 (株)ニッポン放送取締役事業開発局長 シンポジスト：細内 信孝 多摩大学講師 赤池 学 (株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長 海老塚 修 (株)電通スポーツマーケティング部長
17:00	年次総会	議長：井関 利明 イベント学会副会長
17:45	懇親会	順天堂大学 御茶ノ水校 有山記念講堂地下1Fレストラン

# イベントロジーへの途

イベント学会 副会長  
千葉商科大学 政策情報学部長

井関 利明氏



「イベント学」は、従来の「個別科学」とは違う、「重層的非決定な学」。  
まったく新しい学問を創るためにはどうすればよいのだろうか。  
新しい学問を構築していくための問題提起がなされた。

## 「分業と専門分化の時代」から 「関係づくりの時代」へ

20世紀は、近代産業社会が頂点に達した時代であり、その基調は分業と専門分化です。大学でも、教える側と学生が分離された立場であり、市場でも送り手と買い手は隔離されていました。イベントも、創るサイドと受け取るサイドがまったく別でした。

それに対して21世紀は、新しいタイプの「関係づくり」の時代がやってきたのです。かつて分離されていた立場が再統合される時代であり、同時に受け身であった立場が参加をする時代になりました。

マーケティングの分野では、リバース・マーケティング、つまりすべてのビジネス活動は需要サイドから始まり、需要サイドで終わるという考え方ができました。社会が物的に稀少であった時代は、供給サイドが大きな力を持ち得たのです。今では、供給過剰が常態で、需要サイドが大きな力を持つようになりました。そういう時は、需要サイド主導のビジネスが始まるのです。

イベントの場合も同様です。従来は、主催の行政と演出・プロデュース側に焦点がおかれていましたが、これからは、参加者たちの受け止め方、関わり方を重視しなければなりません。背景にあるのは、最近のコミュニケーション論における大きな転換です。従来は、送り手側が、どんな形で情報を集め、編集をし、提示するかが重要でした。しかし、最近の焦点は、同じメッセージが、受け手の「価値観」「文化や民族のバックグラウンド」「居住

地域」「ライフスタイル」などの違いによって、どれだけ異なって受け止められるかということに移りました。受け手側の解釈の多様性と同時にオーディエンスの積極性、能動性が強調されることになります。つまり、送り手と受け手の相互作用を通じて、新しい意味の創造が行われるのです。

イベントも、広い意味でのコミュニケーションの一パタンです。昨日来て、今日来て、明日来たら、そのたびにイベントは別の意味を伝えるかもしれない。参加者の発言やアイデアが取り入れられてイベントそのものが変化していったら、すばらしいことです。そこに参加し、集まってくる人たちが、どんな形でそこに関わり合いながら多様な意味を創りだしていけるか。つまり、イベントは、一つのコンテキストとして、いかなる意味を創りだしてゆくかを問わなければならないように思います。

## 「閉ざされた学問」から 「開かれた学問」へ

従来の学問は「閉ざされた学問」です。内の一貫性と精密性を獲得するために、狭い問題と特定の要因・変数に限定してしまいました。その外側のものは、「他の事情にして一定ならば」という前提をおき、考察から外していました。つまり、視点と範囲の限定という思考実験から出発しているのが個別科学なのです。

では、「開かれた学問」とはどのようなものか。さまざまな形をした問題にじわりと浸透し、いくつもの隙間を埋めようとするれば、アマーバ

ーのように動き、時に応じて形を変える必要があります。自らが新しい要素を取り入れながら変わっていく、そういう不定形のもの「開かれた学問」なのです。新しい人間学としての学「イベントロジー」は、この学会が終わるまで決して完結しないプロセスなのでしょう。今日のインターネットの上では、たえず作り変えられ、形をかえるダイナミックな知的創造が当たり前です。書かれたもの、提案されたものは、たえず書き直され、参加者がいる限り変化していきます。印刷メディアでは、固定した完成形を示すことができますが、デジタル・メディア上では、たえず書きかえられながら変化していくプロセスなのです。

あえていえば、印刷メディアが支配的な時代には、テキストの形に書き込まれた学問が求められますが、デジタル・メディア中心の時代は、学問自体もたえず変化するプロセスに他ならない。もし、「イベントロジー」を教科書の形にすれば、多くの人たちは、テキストの外側にいて、受け身で読みとる立場になります。そうであってはならないのです。会員一人ひとりが関わり合い発言し、参加する学問でなければなりません。「イベントロジー」は、たえず動いていくもので、完成しない知のプロセスなのです。

最後に、人間学としての「イベントロジー」を推進していくために必要な人間行動に関するパラダイムは、もはや供給サイドの合理的意志決定にかかわる「エコノミクス」であってはならないのです。それこそ、新しいパラダイム「ヒドノミクス」でなければなりません。

これまでのEvent観	これからのEvent観
<ul style="list-style-type: none"> <li>●博覧会、展示会、文化・芸能催事、スポーツ大会</li> <li>●供給サイド(主催者)の論理</li> <li>●公共・行政の立場</li> <li>●プロ・専門家主導</li> <li>●Form &amp; Function中心</li> <li>●目的・手段性の強調</li> <li>●Placeにおけるモノの組み立て</li> <li>●演出・プロデュース重視(Encoding)</li> <li>●Contentsの重視</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●メディアとしての場</li> <li>●非連続的・非日常的経験のコンテキスト</li> <li>●需要サイド(参加者)の論理</li> <li>●民間・私的な立場</li> <li>●生活者・住民優先</li> <li>●Meaningの強調</li> <li>●自己充足性(Consummatory)</li> <li>●Spaceにおける共感、共鳴、価値共有</li> <li>●受け止め方、関わり方の重視(Decoding)</li> <li>●Contextの重視</li> </ul>

■「Event」観の転換



■新しい人間行動論(From Economics to Hedonomics)

# 病院における イベントの実態と意義

少子高齢化や病院経営の変化など、  
医療環境が大きく変化している。

また、長寿社会の中で  
“クオリティ・オブ・ライフ”への注目が集まる中、  
病院イベントについての調査を試みた

## 医療環境の変化が 病院のあり方を変える

現在の日本は、医療技術の発達により世界有数の長寿国になりました。しかし、この事実は国民から必ずしも肯定的に捉えられていません。少子高齢化による若年層の負担増、慢性疾患増大による入院の長期化、介護保険の問題など、「長生き」にまつわる否定的なイメージが先行しがちです。

一方、ボランティアが注目されるなか、介護・福祉の活動に携わる人の比率は高く、従来の「施しを与える」というレベルから、ボランティアのサービス提供者が、自分の生きがいのために活動をするといった意識の変化も顕著です。

このように、単に寿命の長さだけではなく、どのような生き方を求めるのかというクオリティ・オブ・ライフ(QOL)を意識した生き方を求めるようになってきました。医療法の改正で病院や医師も、インターネットなどで情報を提供するようになり、患者側もさまざまな情報の中から、自分の求める医療サービスを求めるようになってきました。医療保険制度も変化する中、自己責任で医療機関を選ぶという時代の到来です。

患者の自己責任、病院経営の変化、医者意識の変化が同時に起こり、病院の環境は変化せざるをえないところにきています。

## “QOL”のための病院イベント

心が癒されることで身体が治っていく、という考え方が一般的となった現在、イベントは医療機関運営にとって、有効な手段ではないでしょうか。笑いによってNK細胞の活性化などガン予防になるといった知識は一般的になりつつあるし、「脳の血流量が変わる」、「麻酔の投与量が変わった」という医学レポートが出されています。しかし、残念ながらイベントに関しては、調査や効果測定はされていません。

今回の調査では、積極的にイベントを実施している例が、いくつか見られました。川越胃腸病院(40床・急性期)では、近隣住民や退院した方に招待状を送り、クリスマスコンサートに400人を集めます。病院改装時にイベントスペースにできるような噴水のあるパティオを設けていて、他にも多数のイベントを実施しています。

(株)アートランド代表取締役

## 高田 佳子氏



たかだ・よしこ

1958年 神戸生まれ  
1980年 明石工業高等専門学校建築学科卒業 太陽工業株式会社入社  
1983年 株式会社アートランド設立  
東京ドームCITY&後楽園ゆうえんち、テーマレストラン、ボーリング場等のライブライブエンターテインメント、季節装飾 企画制作  
ジャパンエキスポ佐賀'96世界・森の博覧会 ストリートパフォーマンス

ス企画制作

女性のためのテーマパーク ヴィーナスフォート  
第1回堺芸術芸能フェスティバル  
大道芸総合プロデューサー  
『大道芸イキイキ空間』(学芸出版)  
『風船でつくろう!たのしい動物園』(金の星社)  
『フェイス・ペインティング』(大月書店)

また、柿生病院(194床・老人)では、お誕生会やお花見会など季節のお食事会を頻繁に催し、家族も招待しています。これによって、寝たきり高齢者を活性化するとともに、家族の足が遠のかない工夫をしておられます。都立や国立病院でも、ボランティアの手によるコンサートやパーティなどが開催されている例は数多く見られました。

こうしたイベントは、患者の気分転換や娯楽、癒しの提供を目的として実施されるわけですが、準備を通してスタッフの学習やリフレッシュが図られたり、またお互いのコミュニケーションに大きな効果をあげています。また、スタッフと患者だけではなく、家族、さらには地域住民との信頼関係が得られるようになったといいます。イベント実施によって地域住民からの苦情が激減したり、定期的なイベントの開催で、地域の中で親しまれる場所になりつつあるという例もありました。閉鎖的と思われがちな病院において、イベントが相互理解やコミュニケーションのきっかけとなるという結果ははっきりと出ています。

しかし、場所や人手、予算がないなど、様々な理由からイベントが実施されていない病院もたくさんあります。少子高齢化社会の中で、QOLを考慮した医療を提供するためには、イベントは医療機関と患者との相互理解の場としてたいへん有効です。また、病院が地域インフラの一つとして考えられる時代ですので、地域における病院の存在意義をアピールする意味で、イベントは大きな役割を果たすものと考えます。病院が、人間の修理工場としてではなく、広く癒しの場として機能するためには、イベントの価値と効果が十分に認識され、広まっていくことが重要でしょう。

病院名	住所	病床数	主な診療科目
川越胃腸病院	川崎市	40床	消化器科(外科・内科)専門
柿生病院	川崎市	194床	老年医学・リハビリテーション科
都立駒込病院	文京区	801床	総合
都立大塚病院	豊島区	500床	総合
国立ガンセンター中央病院	中央区	600床	総合

■調査病院

# 『街イベント』の最新傾向と その効果的活用事例

地域活性化は、『地域あげての取り組み』でなければ容易に実現はしない。

住民自らが、ビジョンを描き、その実現を目指して、できることから取り組んでいく。

これからは、そういった街づくりの発想が必要だ。

## 参画型イベントの相乗効果

今までの商店街は、人寄せのために「セーラムーン」を呼んでくるといったサービスイベントが中心でしたが、今後は、それだけではなく、街の人が、「街を変える」という発想でイベントに「参画」することが必要になってきます。

大阪の天神橋筋の商店街、東京・足立区の東和銀座商店街、京都の西新道錦商店街、滋賀県長浜市の株式会社黒壁をはじめ、街の人々が参画できる仕組みをつくりあげた街はいくつもありますが、いずれも、優れたリーダーシップを発揮しているイベントの仕掛け人がいます。環境問題への取り組みを核にした東京都の早稲田の商店街もそうした例の一つであり、大変、成功しています。

このイベントは、1996年、夏枯れ対策として始まりました。「環境問題をやれば話題になるんじゃないか」という軽い発想で、空缶やペットボトルを持って行けばゲームができ、高級ホテルの宿泊券など様々な景品が当たるというイベントを開催しました。これが大受けし、空缶が1,300缶集まり、マスコミに取り上げられたのです。

環境問題に取り組むなら、1日だけイベントをやっても意味がありません。そこで、3ヵ月後に、「ゴミゼロ平常時実験」という同様のイベントを1ヵ月間開催したのです。商店街8か所にごみの収集場を作り、空缶一つでハワイ旅行が当たる「ゴミからハワイ」を実施。最初の1週間で空缶23,200缶、ペットボトル1,716本が集まったそうです。

その後、空缶を入れれば「ラッキーチケット」が出てくる「空缶回収機」を設置した「エコステーション」の常設を始めました。ラッキーチケットには、餃子の無料券や歯医者無料診断券などがあります。同時に、ゴミ問題だけではなく、地震に強い街づくりや、バリアフリーの街づくりなどにも着手しています。余談ですが、ボランティアでこの実験にかかわった一人が、当時、早稲田大学1年生だった乙武洋匡さん。この体験が「五体不満足」の執筆につながりました。「環境の街早稲田」として有名になったので、修学旅行先やリサイクルサミットの会場にも選ばれています。

## イベントが生活の生きた実験場

商店街が核となって街を変える運動をすべきだ、という意識の表われの一つとして、株式会社商店街ネットワークが設立されました。

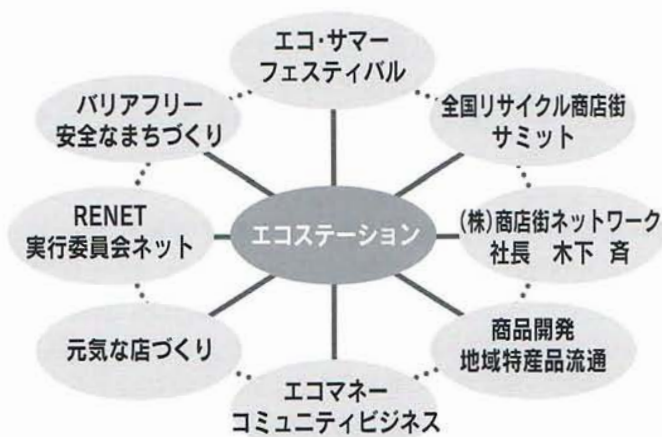
コーソー戦略研究所所長

後久 博氏



ごきゅう・ひろし  
1946年 大阪府豊中市生まれ  
1968年 同志社大学工学部中退  
1975年 イベント企画・制作会社  
(株)源郷社入社 1984年 (株)  
源郷社退社 イベントプロデュ  
ース会社(株)コーソー設立 1998  
年 コーソー戦略研究所設立 所  
長となる  
新宿の街イベントの企画 商店街

活性化イベント指導 中小企業大  
学校タウンマネージャー養成講座  
講師 商工会、商工会議所にて中  
心市街地活性化講師 テーマ商店  
街「幸福商店街(門真市古川橋本通  
商店街)」、「ハープ商店街(新潟県  
塩沢上町商店街)」等指導  
著作:「空き店舗絶滅作戦」(内山工  
房)



### ■エコステーションを核に多様な展開

この会社の社長は、早稲田学院高校3年生の木下育君です。彼がインターネットやゴミゼロ事業展開に関する一番のアイデアマンだったからです。

「ラッキーチケット」の他にも、街の生ゴミ→堆肥→大豆→豆腐をつくる循環システムや、親切を交換する「エコマネー」などが生まれています。例えば早稲田の学生が高齢者にパソコンを教えたとエコマネーが払われる。今度は、その高齢者の家で昼寝の場を提供してもらってエコマネーを払うといったものです。こうした展開を、行政、大学関係者、一般住民たちがメーリングリストで情報交換しています。

早稲田の成功の秘訣は、まず、時代のテーマをタイムリーにイベント化したことでしょう。合い言葉は「楽しいことをやろうよ」。安井潤一郎さんという優れたコーディネーターの存在も重要です。さらに、イベントを手段として活用し、新事業の可能性を実験しています。そこからオリジナルブランドが生まれ、マスコミ評価を高めています。

早稲田のこうした動きで最も注目したいことは、これらはみな「生活の生きた実験場」になっていることです。イベントが商店街という街の中で実施されているので、受け手である住民は生活満足度を高め、送り手である企業はビジネス上のメリットが得られる上に、PR効果も高い。さらに、行政からの補助金も出ています。こういう点で、早稲田のシステムは秀逸だと思います。

# ユニバーサルイベントの視点

国際社会の価値観のスタンダードとして、あるいは日本の少子高齢社会の課題解決策としてユニバーサルデザインが注目されている。この考え方をイベントに当てはめればどうということになるのか。新たな産業の活性化の実験の場になる可能性があるだろう。

## 国際化と少子高齢化が要求するユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインは、ヒューマンセンタード・デザイン、共有品とも呼ばれています。年齢や障害の有無にかかわらず、誰でも安全で快適に過ごせる建物、空間、サービスをデザインするという考えです。たとえばシャンプーとリンスは普通は同じ形のボトルです。目の見えない方には区別がつかない。花王はシャンプーの側面にギザギザを入れることでリンスとシャンプーを区別しました。髪を洗う時は、誰でも目を閉じているので、これは誰にとっても便利です。こうした“皆が一緒に使える”ものがユニバーサルデザインなのです。人口構成の変化をはじめ、社会の構造が大きく変革している中で、このユニバーサルデザインが注目されています。その要因は、次の二つだと思います。一つは国際社会の価値観のスタンダードとして、二つ目は、日本の少子高齢社会の課題解決策としてです。

ユニバーサルデザインの基礎となる考え方はノーマライゼーション。「高齢者も障害者も子供も女性も男性も、すべての人々が人種や年齢、身体的条件に関わりなく自分らしく生き、やりたい仕事ができる。そうしたチャンスが平等に与えられる社会が当たり前だ」とする考えです。このノーマライゼーションを最初に法制化したのが、1959年のデンマーク。その考え方は、まず欧米で発達し、国連は精神薄弱者の権利宣言、障害者の権利宣言、国際婦人年など数々の人権推進を提唱してきました。現在、国際社会ではノーマライゼーションがスタンダードになっています。それを実現していくためにもユニバーサルデザインが重要なのです。

一方、日本は、少子化の進展と長寿化によって、世界に例のない勢いで超高齢社会に突き進んでいます。国連は「日本が1998年の

(株)UDジャパン代表取締役  
(旧社名・内山工房)

## 内山 早苗氏



うちやま さなえ

1945年 東京生まれ  
1969年 明治大学文学部卒業  
1969年 出版研究会にて「出版ダイジェスト」の企画編集に従事、その後、福村出版・二玄社にて、教育、心理学分野の企画編集に従事  
1990年 有限会社内山工房設立代表取締役就任 1996年 株式会社にて組織変更 1997年 高齢社会を生き抜く人づくり塾開設 主宰に就任 2001年 株式会社UDジャパンに社名変更  
独立行政法人国立女性教育会館「高齢社会に向けての男女共同参画学習に関する調査研究」研究員委員

世田谷区生活工房「ヒューマンセンターデザイン100人委員会」委員委員 平成12年度中小企業活路開拓調査・実現化事業「経営革新及び新たな事業分野への進出」全国万葉会 仏壇仏具協同組合 専門会員委員、コンサルタント  
日本イベントプロデュース協会15周年フォーラム「ユニバーサルイベントの方向を探る」総合企画及びパネルディスカッションのコーディネーター  
『いまなぜユニバーサルイベントなのか(共著)』(JEPC発行)「経営革新及び新たな事業分野への進出」報告論文

生産年齢人口を維持するためには、毎年1万人の外国人労働者を受け入れていくか、あるいは定年を77歳にする必要がある」というショッキングな調査結果を出しています。子供は少ししか生まれず、生産年齢人口が減る。こうした観点からも、高齢者や女性、ハンディのある人が働きやすいユニバーサル環境を作ることは急務です。

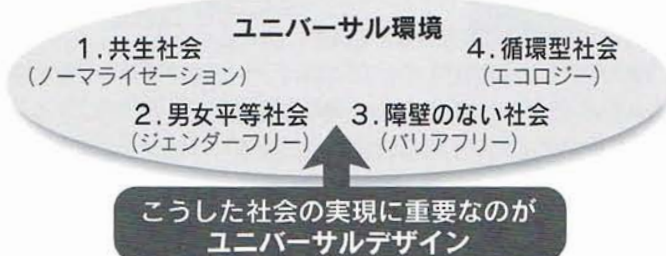
## 新しい産業の可能性を探るユニバーサルイベント

イベントにユニバーサルデザインの考え方を当てはめるとどうということになるでしょうか？ ユニバーサルイベントでは、参加を希望するすべての人たちが年齢や性別、人種、身体的条件に関わりなく参加でき、十分なコミュニケーションを図れる必要があります。そのためには企画や構成、会場設計、運営にユニバーサルデザインの考え方が生きてこなくてはなりません。

耳が聞こえない人はどう参加してコミュニケーションを図るのか、高齢になって足が不自由になっても快適に参加するには何をすればいいの、みんなが参加できるアクセシビリティを考えていく必要があります。

イベントを、いろんなことを試すチャンスの場合と考えれば、実験の場として活用することもできます。サインや点字をどこにでも印刷できる機械、目が見えない人が運転できる車など、驚くような技術開発に取り組んでいる企業もあります。このような開発途上のものをイベントに出展し、参加者と一緒に、さらにどう開発すればいいか考えることもできます。ITの非常な普及により、一度来場したあと、次回はインターネットでの参加もできるのです。来場者からのアイデアをITで集めて、意見交換するなど、新しい参画型のイベントで、開発途中の商品をつくりあげることできます。

ユニバーサルデザイン、ユニバーサルイベントは、新たな視点からの産業の活性化の可能性もあるはずだと思います。



### ユニバーサル環境を支えるユニバーサルデザイン

# グローバルスポーツイベントと スポーツ・ツーリズム

- W杯と欧州サッカー選手権大会に着目して -

順天堂大学  
スポーツ健康科学部教授

野川 春夫氏



のがわ・はるお  
1949年 東京都生まれ  
1971年 東京学芸大学教育学部卒業  
1983年 米国オレゴン州立大学教  
育学部大学院博士課程修了  
1988年 鹿屋体育大学助教授  
1998年 順天堂大学教授

『サッカー・世界の言葉』(サイエン  
ティスト社)  
『オリンピックの汚れた貴族(監訳)』  
(サイエンティスト社)  
『The Japanese Dream:Soccer  
Culture Towards the New  
Millennium』in Football Cultures  
and Identities MacMillan  
Publishing

来年に迫った日韓共催W杯。

多額の経済効果を得るには、どのような方策を練るべきか。

過去のW杯や欧州サッカー選手権大会(Euro)の例をもとに、検証する。

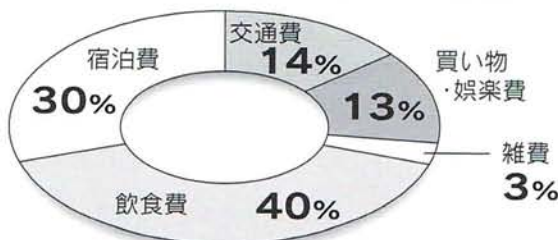
## 地域に多大な経済効果をもたらす スポーツ・ツーリズム

オリンピックやW杯、今年のコンフェデレーションズカップなど、グローバルスポーツイベントには、世界中から大勢の観客が訪れます。その点に着目し、スポーツと旅行を組み合わせる新しい観光資源とする考え方、つまり「スポーツ・ツーリズム」への関心が高まっています。

スポーツ・ツーリズムを大きく種別すると、スポーツイベント参加のための旅行、スポーツイベント観戦のための旅行、趣味のスポーツ参加のための旅行の3つが考えられます。参加型スポーツ・ツーリズムの代表例は、ホノルルマラソンです。参加者の7割を占める日本人参加者が、1週間で約100億円の経済効果をオアフ島にもたらすといわれています。埼玉県東松山市で催されるスリーデーマラソンは、ただ歩くだけのイベントですが、3日間で80,000~90,000人を集め、10億円以上の直接消費効果を東松山市にもたらしています。

観戦型スポーツ・ツーリズムで特記すべきなのは3年前のフランスW杯です。同大会は4万人もの日本人が観戦に行きました。7日間578,000円のツアー商品がたちまち完売したそうです。また1994年のアメリカW杯ではテキサス州ダラスだけで約360億円の経済効果があり、Euro'96英国大会では、約280,000人の海外からの観客が1億2000万ポンドをイベント開催地で使ったと報告されています。

スポーツ・ツーリズムの人気の理由は、まず、自由時間の増大が挙げられます。アクティブなライフスタイルを他の場所で実践したいという願望も考えられるでしょう。また、「Jリーグを見るよりセリエA」といった本物志向の高まりも挙げられます。さらに最近では、「あなたが主役」型の市民イベントが増えてきました。東京国際マラソン



■ W杯スポーツ・ツーリストの直接消費(内訳)

は一定の時間で競技が終わりますが、ホノルルマラソンは8~9時間走っていても構いません。参加者の満足感を優先させるようなイベントに、客はお金を使っても惜しくないわけです。

一方、スポーツイベントの開催地にも多様な便益がもたらされます。まず観光客が直接お金を消費することに加え、メディアの露出度が高まることで開催地のイメージアップにもつながります。また、集客力が上がることでビジネスチャンスも広がり、イベント運営のためのボランティアを募ることで地域の人材の発掘にもつながります。

## 1200億円の経済効果を 掴むための方策

電通総研によると、来年のW杯の経済波及効果は約2兆円、うち国内外観光客の経済効果が各600億円ずつと算出されています。この1200億円の市場を開催地やキャンプ地が掴むには、大会実行委員会だけでなく開催地とキャンプ地が連携し、魅力的なプログラムを提供することが大切です。

まず第一に、ミニ国際交流プログラムを開発することが重要です。例えばフランスW杯では、本大会に出場していない24カ国の少年チームを招待し、ミニW杯を催しました。シニアや在日外国人チームを対象にしたミニW杯も有効でしょう。

第二に、移動手段対策を十分に講じるべきです。W杯では50,000~60,000人が電車で乗り、交通が非常に混雑することが予想されます。シドニーオリンピックやEuro2000大会では、観戦チケットを持つ人に対し、ローカルの交通機関を全て無料にしました。地域・日程限定のジャパンレールバスや、日韓間の移動での羽田空港の具体的な利用方策なども視野に入れるべきでしょう。

第三に、長期間滞在してもらうために、宿泊施設や食事、交通を組み合わせるリーズナブルなパッケージを提供すべきです。スポーツ観光客のために、簡易宿泊施設の設置も考慮する必要があります。Euro2000大会では都心から離れた大きな野原や公園に簡易トイレやシャワーを設け、観光客が安く泊まれるようにしました。日本では公園が無理でも、毎年増加する廃校を宿泊施設として提供するなど、様々な形が考えられるでしょう。

# 行政イベントの構造と課題

行政イベント研究会

グローバル化が進む中、行政イベントの役割が後退している。  
これからは、「新しい公共的なテーマをイベント化すること」  
「生活者の自己実現を支援すること」が求められるのではないか。

◇行政イベント研究会◇  
昨年11月に、約20名のイベント学会員が自主的に集まり、発足した研究会。現在、23名の会員が「行政イベント」について、毎月議論を重ねている。



(株)ケーピー代表取締役

座長 **森下 慶子氏**

今年度は、「行政イベントとは何か」を主要テーマに、行政主導のイベントである愛知万博についての提言をまとめてきました。まだ明確な結論は出ていませんが、あまりにも楽しい議論が11月から続いております。今回の発表では、その議論のプロセスの一部を、田村さんと金田さんにプレゼンテーションしていただこうと思っております。

あくまでも個人会員として、好きなことを言いあい、行政イベントを研究することが、行政イベント研究会の狙いです。こういう議論をしてみたいという方がいらっしゃいましたら、ぜひご参加ください。

(株)東急エージェンシー  
名古屋支社ネットワーク本部  
第一営業部長

**中野 彰氏**



## 「行政イベント」のこれから

(株)博報堂  
事業カンパニー計画管理室長代理

**田村 国昭氏**



行政イベントは、行政がある政策、目的を定着・達成させるために、税金・役務を提供し、国民・市民・企業・団体の参加を得て行う直接的コミュニケーション手法の一つです。その目的は、人々が共有すべき時間・空間の楽しみ、夢、時代認識、変革の方向性について、共に議論や体験を非日常的・短期的・集中的に行い、来るべき将来像や現状を浮き彫りにすることにあるといえます。

特に大規模な行政イベントは国威の発揚や対外アピールをもたらしてきました。戦後10年間は、全国復興産業博や国際見本市の開始など、国も企業も国民も日本の再興をイベントオリエンテッド

に図ってきました。そして1964年の東京オリンピックによって「国際化」というキーワードが生まれました。高度成長の象徴が1970年の大阪万博。1975年の海洋博では「戦後は終わった」というキーワードのもと、沖縄が帰ってきたわけです。

しかし、石油多消費型の成長は終わり、1985年のつくば博では省資源・科学技術立国を目指します。ところがバブル経済が日本を襲い、グローバリゼーションが進むにつれ、行政イベントはその力を消失していきます。未来志向のテーマは不足し、非日常の日常化によってイベントが色あせて見える。開発型のイベントはうさん臭さを感じられてきました。

しかし、その中でも国民は、公共的なテーマに関心を寄せています。科学技術立国、教育改革、環境対応、高齢少子化、歴史の継承、国際交流などのテーマをイベント化することが重要でしょう。そのためには、大きな構想力や時代を発見する力を取り戻すこと、イベントの手法と形態の変革が必要といえます。

## 行政イベントの構造と課題

(株)新東通信 開発本部

**金田 秀一氏**



ボーダレス化が進み、国や国民といった概念があまり意味を持たない社会が到来しつつあります。宇宙飛行士の毛利さんは、「地球市民」という概念を持つべきだと語っています。テキサス州センターポイント市では、住民が自らの行政単位である市政を廃止しました。行政の在り方や役割をゼロベースで見直す、新しい時代のうねりが始まったといえるでしょう。

行政は、土地の区割りで統括されており、行政イベントも土地

が起点になって開催されています。行政イベントは、地域の問題や課題の解決の手段でした。しかし現在は、それが行われる施設が市民の生活動線上にないという状況が生まれています。例えば千葉の県境に住み、東京に勤める会社員は、千葉市の中心部でイベントが行われても馴染みにくい。従来は、そうした住民を行政エリアへ回帰させる発想でしたが、個人の興味が十人十色に細分化された今日においては、非常にやりづらいわけです。

今後は、マーケットイン、つまり日常生活の希望に踏み込む発想で、生活者の自己実現を支援するイベント手法を開発することが大切といえるでしょう。このイベントは、多様な人材の種まきイベントともいえます。「土地」が起点ではなく、「人」を起点とする発想です。このようなことを育英する制度を設け、インキュベーションし、コラボレーションしていきたいと考えています。

# シンポジウム 社会環境の変化が イベントをどう変えるか



## 間宮 聡夫氏

イベント学会理事  
順天堂大学スポーツ健康科学部客員教授



従来のイベントはコミュニケーション・メディアとして、特定の主体によって企画運営され、明確な目的の下に、特定の期間・場所で、明確な対象に対して情報を体感させる仕組みとして捉えられてきました。しかし現在では、イベントの送り手も受け手も複層的な構造に変化しています。これは「21世紀だ

から…」というわけではなく、偶然にIT革命により社会環境が変わってきた結果です。そこで、このシンポジウムでは「社会環境の変化がイベントをどう変えるか」と題し、5名の方のそれぞれの立場から、今後のイベントの意義や方向性について、ご提言いただきたいと思います。

## 「テーマ型コミュニティ」がイベントの軸となる

### 細内 信孝氏

多摩大学講師  
コミュニティビジネス総合研究所所長  
コミュニティ・ビジネス・ネットワーク理事長



私が提唱する「コミュニティ・ビジネス」とは、住民が生活者の視点に立ち、地域の事業を手掛けることを指します。それは従来のマクロ経済やミクロ経済では抜け落ちていた「コミュニティの経済」を取り入れ、生活の質を向上させ且つ地域の雇用創出を目指すことです。現在の閉塞した社会構造を見ると、これからは人間性の回帰、生の喜びを得ることが求められるでしょう。まさに「コミュニテ

ィ・ビジネス」をうち立てていく必要に迫られているわけです。その方法論の一つに「祭り」があります。伊勢神宮の遷宮や諏訪の御柱祭り等、従来の祭りは相当な経済効果を与えるコミュニティ・ビジネスです。ただし、その構成要素は氏子を中心とした「地縁型コミュニティ」。それが現在は、ITの進展や市民が主体性を持つ「市民力」の高まりから、一つのテーマに賛同した人々により形作られる「テーマ型コミュニティ」に変わりつつあります。YOSAKOIソーラン祭りやなまはげ祭りはその典型で、前者は若者を中心とする組織委員会が後者は50人の市民NPOが運営しています。こうした新たなコミュニティを軸にした社会づくりがコミュニティ・ビジネスを生み、大きくイベントの有様を変えていくのではないのでしょうか。

## 地域振興を促す「地域経営型イベント」

地域振興という面からイベントを考えると、これまでは「地域販促型のイベント」でした。その代表が大分県の「一村一品運動」や竹下政権下の「ふるさと創生事業」で、そこには光と影の部分がありました。光の部分は行政の中に地域の主体性というイノベーションを持ち込んだことです。しかし時を経て、それらが単に農産物の加工事業と人集めのためのイベントと歪曲されたり、手段であるべきイベントが目的化し、ただ消化するためのものと成り下がった面があります。真の地域振興とは、地域の中で「働く⇔生きる⇔暮らす」という循環構造を作ることです。そう考えると、これからの地域振興イベントは「地域経営型のイベント」でなければなりません。それを達成するためには、自立や経営の感覚が不可欠です。その際に、重要なのが、行政と住

## 松村 広一氏

関東農政局農村振興課課長補佐



民との「地域コミュニティづくり」や、自分たちがどう変わりたいかということに対する「合意形成力」でしょう。ところが現状では自治体は住民との付き合い方が上手とはいえません。これからの行政マンには、政策の理念、価値、評価等を、分かりやすく住民に見せる技術、そして二つの想像力・創造力が必要です。その手法としても、イベントが、非常に重要なものとなってくると思います。



21世紀を迎え、私たちの社会環境は劇的に変化しつつある。  
この変化は、イベントにどのような影響をもたらすのだろうか。  
「コミュニティ・ビジネス」「ユニバーサル・デザイン」  
「地域振興」「音楽」「スポーツ」のテーマにおいて、  
各界を代表する5名が提言した。



### 赤池 学氏

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長

これからのイベントに期待されるキーワードの一つに、20世紀のコミュニティが失ってきた「匠」の機能の再考と復権があげられます。例えば、ウィーンのある芸術家集団は「コミュニティが望んでいる社会システムを集団で作る」というアートイベントを手掛けました。ウィーン市内のホームレス問題に着目し、彼らはホームレス向けにバスを医療診断用に改造し、巡回診断した。これは自治体が引き継ぎ、

## 「ワーキング・トゥギャザー」で社会づくりを

今も社会基盤として残っています。また、今年7月のうつくしま未来博で、私は「ムシテック・ワールド」というテーマ館のプロデューサーを務めています。15体の巨大な昆虫模型から、虫が持っている先端技術を体感してもらおうというのですが、このコンテンツは、科学者と企業の技術者による組織委員会が作り上げました。このように多くのノウハウ、スキルを持った人が「ワーキングトゥギャザー」型で参画し、求められる製品や社会システムを作り上げていく。実は、これは、ユニバーサルデザインの一番重要な考え方であり、イベントそのものの新しいモデルにもなるのではないのでしょうか。イベントのスキルを利用しながら、新しいモノ作りのビジネスモデルを創り、地域に根付かせていきたいと考えています。

## イベントで重要なのは「感動」の共有

ラジオ局で仕事をしていて「イベントとは何か?」といえ、それは「感動」だと考えます。例えばニッポン放送が主催する音楽イベントに「ティーンズ・ミュージック・フェスティバル」があります。これは音楽の甲子園のようなもので、バンド活動をしている十代の若者たちに、発表の場を与えていこうという試みです。約5,000組が全国の地区予選を勝ち進み、その結果、20組のバンドが決勝大会を行います。決勝では毎年、バンドと聴衆が一体となり、最後には、違うバンドの応援団同士が、握手しながら、涙を流して喜び合うという、感動的なシーンが見られます。もう一つ「ラジオ・チャリティー・ミュージックソン」というイベントがあります。これは24時間放送を通じて募金を募るチャリティー番組ですが、最終的に泣くのは、パーソナリティーやスタ



### 宮本 幸一氏

(株)ニッポン放送取締役事業開発局長

ッフなんです。募金してくれた人達の温かい心に触れて、自分たち自身が感動する。そしてその感動を日々の番組作りのエネルギーにしていく。作り手が感動できないイベントは、絶対他人を感動させることはできません。参加者とスタッフが一体となって感動できる。それが、今、求められるイベントの形ではないのでしょうか。



### 海老塚 修氏

(株)電通スポーツマーケティング局部長  
横浜市スポーツ振興事業団評議員

スポーツ・マーケティングの視点からすると、スポーツ・イベントには「イベントを通じて国や街を売る」という側面があります。例えば、かつての東京オリンピックに代表されるように、スポーツ・イベントをてこにしてインフラを整備するということがありました。現在でも、スポーツ施設を造り、国際的なイベントを誘致しようとするのは、それによってシティ・セールスを行ったり、国際的なアイデンテ

## 国際的なスポーツ・イベントが社会環境を変える

ィティを高めようというわけです。また、そういった情報発信の一方で、今はイチロー選手や中田選手などが活躍するメジャーリーグやセリエAが、日本の国際化にとっての一つの「窓」となっています。彼らの活躍を報道するメディアを通じて、我々の意識の中で、欧米やその他の世界の国々は、かなり近くなってきています。その上で、来年は日韓共催のサッカーW杯が開かれるわけです。選手やファンを含め、世界各国の人が日本に集まるでしょう。これによって、非常に強く大きな国際化の波が日本に押し寄せるはず。社会環境の変化は、確かにスポーツ・イベントを変えますが、逆にスポーツ・イベントが社会環境を変えることも、私はあると思っています。



# Platform

学会員からの声

『Platform』では、全国の学会員の意見、アイデア、提言などを紹介していく予定です。今回は「2001年度研究大会」の参加者を対象に実施したアンケートに寄せられたご意見を、掲載させていただきました。

今回の研究大会は、様々な立場の考え方を伺うことができ、楽しかった。しかし、多くの発言者が、これからのイベントに必要なキーワードとして「ユニバーサル」「グローバル」を挙げているのが気になった。こうした概念は、言葉は違えど、大昔からイベントにはあったのではないだろうか。私個人は、イベントとは、人が存在する限り、常に変化し、人間に「ある考え方」を与えるものだと思っている。  
(法人会員)

「新世紀イベントを創造する」という、今回の研究テーマは、非常に良かったと思う。しかし、正直なところ、テーマにぴたりと照準があった発表が少ないと感じた。将来は、「テーマ発表」と「自由発表」に分けることも検討してみたいだろうか。  
(個人会員)

イベント業界で何かする時、いつも顔ぶれが変わらない気がする。今後は、より多くの業種、業界が関心を持つテーマが必要となるかと思う。例えば「イベントを支える協業・ネットワーク」などのテーマを掲げてみても、おもしろいのではないだろうか。  
(法人会員)

昨年、大阪大会に出席しました。大変おもしろく感動したので、是非、また参加したいと思っています。関東(東日本)に赴くのは困難な面もありますので、今後も、関西方面(西日本)での研究大会の開催をお願いします。  
(個人会員)

21世紀に入ったのに、『ゾクゾク』『ワクワク』がみえてこない。変わった顔ぶれ、刺激的なテーマをどんどん出して、20世紀をブレイクスルーできる新学説、ビッグアイデアを「続々」、「湧く湧く」出してほしい。  
(個人会員)

シンポジウムのシンポジスト5名は多すぎるのではないかと。せっかく興味深い意見を述べているのだから、もっとじっくり聞きたい。シンポジストの人数を減らして、一人ひとりの発言時間に余裕を持たせたいだろうか。  
(個人会員)

今回のテーマは、あまりにも抽象的過ぎたのではないだろうか。シンポジウムでは、テーマと各発言者の話の内容がかみ合っていない場面が見受けられた。質疑応答では「イベント」と関係ない話題も出ていた。主催者側がもう少しコントロールしたほうが良いのではないだろうか。  
(準会員)

大学に入ったばかりの私にとって、イベントに関する知識は、授業で習ったほんの触りの部分しかなかった。今回参加させていただき、様々な場所で、様々な目的のイベントが存在することが分かり、非常に有意義であった。  
(準会員)

シンポジウムでのお話はとてもためになった。少し発表時間が長いので疲れてしまったが、レジュメが用意されていたのは良かった。  
(準会員)

幅広い角度から「イベント」を考えることができた。とくに国際的なスポーツイベントについては刺激を受け、自分なりにもっと勉強したい。  
(準会員)

## 投稿をお待ちしています

『EVENTOLOGY』では、学会員の皆様のご意見を募集しております。イベント学会は、学会員全員でつくっていく学会です。『タウンコミュニティの再生とイベント』(次回イベント学会多摩大会テーマ)、『イベント学会』、『EVENTOLOGY』などについての感想、ご意見などをお待ちしております。

原稿は300字以内にまとめ、住所、氏名、年齢、電話番号、メールアドレス等を明記してください。なお、掲載分は文章を一部手直しさせていただく場合があることを、ご了承ください。

## 宛先

〒102-0082

東京都千代田区一番町13(一番町法眼坂ビル)

「イベント学会事務局・EVENTOLOGY『Platform』係」

FAXは03-5215-1716

# 2001年度総会開催

研究大会終了後、同会場で引き続き2001年度通常総会が開催されました。

2000年度活動報告および決算報告と2001年度活動計画ならびに予算案が承認されました。

2001年度年次大会は、8月25日多摩市で開催される「リボンフェスタ多摩」に協力、記念シンポジウムを主催することを決定しました。

2年後、2003年にイベント学会は設立5周年を迎えますが、学会活動の再構成・活性化のための下記の提案が承認されました。

## 「学会の活性化」に向けて—「運営委員会」が始動します—

マネジメント委員会では、本年初頭より「学会の活性化」「開かれた学会運営」をめざして検討を重ねてきました。この1～2年間、会員有志より「もっと実践的な研究活動はできないか」、あるいは「会員としてもメリットが十分に伝わっていない」「会員としてもっと活動したい」などの声が寄せられていたことに対し、前向きに答えてゆくためです。その結果、以下のような課題とテーマについて、5月の理事会、そして6月22日の総会において報告し、了承を得ました。

- ①2002年の役員(理事)改選に向けて、「開かれた学会運営」の立場から全会員参加の公開選挙を行うべきと考える。
- ②現在、役員構成の中で、理事長、副理事長など主要役員のいくつかが空席であり、「運営体制強化」の面から、役員の補充を含めた体制のあり方を再検討する。
- ③今後の「学会運営」に向けて、広く会員の意向を把握し、個人会員、法人会員の意見を取り入れるための「アンケート調査」「意見聴取」など、調査活動を実施したい。

また、上記の取り組みを実行するために、本年7月より、マネジメント委員会委員長でもある井関利明副会長を責任者とする「運営委員会」を設け、「会則の見直し」、「理事選挙規定の詳細化」「学会運営方針の明確化」に取り組むたいと考えます。

この委員会は、会長、副会長の指名した理事、会員6～8名程度で構成、任期は2002年6月(次回、総会時)までの1年間で予定しています。総会では、この「運営委員会」の設置についても提案・了承されました。

また、会則上(第13条)学会運営の責任者は「理事長」となっていますが、諸般の事情で空席のまま、今日に至っています。運営上の支障もあり、2002年6月の理事改選時まで、暫定措置として、木村尚三郎会長に理事長兼務をお願いすることといたしました。

この会長の理事長兼務については、同じく6月22日の総会にて提案され了解されました。

会員の皆様には、今後、アンケートにご協力をお願いしたり、学会運営についてのご意見を伺う機会があると思います。よりよい学会運営に向けて、忌憚のないご意見をお寄せ下さるようお願いいたします。(文責：上野征洋)

学会  
短信

## 木村尚三郎会長、泉眞也理事、愛知万博の総合プロデューサーに就任

2005年日本国際博覧会(愛知万博)の総合プロデューサーに、イベント学会の木村尚三郎会長と泉眞也理事のお二人が選任され、他に建築家の菊竹清訓氏が加わり、3人制で計画の推進にあたることになりました。

その下で実務を担当するチーフプロデューサーに、会員の福井昌平、牧村真史の両氏と建築家の原田鎮郎の3氏が選ばれました。(7月23日)

# 「2001年度・準年次大会」のお知らせ

イベント学会は、「2001年度・準年次大会」として『リボンフェスタ多摩—2001・記念シンポジウム』を下記の大会要項により開催しますので、会員の皆様はご参加ください。なお、特別講師として、札幌で活躍している長谷川岳・YOSAKOIソーラン祭り組織委員会専務理事が出演します。

## ■背景■

1960年代に開発された多摩ニュータウンは、第1次入居から30年目を迎え、入居当時30～40代の働き盛りだった世帯主が60～70代と高齢化し、さらに少子化に加えてバブル崩壊後の転入人口の伸び悩み、近隣商店街の不振などの悩みを抱えています。

こうしたニュータウンを元気のある街にしようと、数年前から「多摩ニュータウン学会」をつくり、調査・研究を行う一方、住民有志がNPO「多摩ニュータウン再生機構（愛称：リボン多摩／※re-born=再生、ribbon=人と人・心と心を結ぶリボン）」を設立。市民主導により、行政、企業、学会とパートナーシップを組み、事業やイベン

トを展開することになりました。

今回、多摩ニュータウン再生機構は、「リボン多摩」設立のPRと、新たな地域文化としての「祭り」を創出するため、『リボンフェスタ多摩2001』を開催。①記念シンポジウムと②多摩ニュータウン全地域の盆踊りの連の総結集を試みます。

イベント学会では、有志が「多摩ニュータウン学会」の設立から、NPO「リボン多摩」の立ち上げまで、多面的に協力してきましたが、イベント学会理事会および2001年度総会において、今後の学会活動の方向からみても重要であるとして、正式に協力することになりました。

## ■大会要項

### ■名称：

「イベント学会2001年度・準年次大会  
—リボンフェスタ多摩2001記念シンポジウム—」

### ■テーマ：

『タウンコミュニティの再生とイベント  
～新たな伝統の創造と地域文化の創出～』

### ■日時：2001年8月25日(土)

14:00～17:00

### ■会場：パルテノン多摩・小ホール

(京王線・小田急線・多摩都市モノレール「多摩センター駅」から徒歩5分)

### ■参加費：無料(定員200名)

### ■参加申込：

8月17日(金)までに別添申込用紙を事務局宛にFAXまたは郵送でお送り下さい。

### ■2001年大会実行委員会：

実行委員長 望月 照彦  
イベント学会理事・多摩大学教授

実行委員 犬塚 潤一郎  
リベラルアーツ総合研究所代表

宮木 宗治  
(株)博報堂事業カンパニー事業マーケティング部長

## ■プログラム

### 8月25日(土)

12:30	シティ・オリエンテーション (会場：ベネッセコーポレーション15階展望室)	
13:45	講師：成瀬 恵宏 (株)都市設計工房社長	
13:30	開場 総合コーディネーター： 望月 照彦 大会実行委員長・多摩大学教授	
14:00	あいさつ 望月 照彦 大会実行委員長・多摩大学教授	
14:10	特別講演「街を元気にするイベントづくり」 講師：長谷川 岳 YOSAKOIソーラン祭り組織委員会専務理事	
15:00	シンポジウム 「タウンコミュニティ再生とイベントづくり」 コーディネーター： 犬塚 潤一郎 リベラルアーツ総合研究所代表	
17:00	シンポジスト： 堤 香苗 キャリア・ママ代表 成瀬 恵宏 (株)都市設計工房社長 長谷川 岳 YOSAKOIソーラン祭り組織委員会専務理事 細内 信孝 多摩大学講師 宮木 宗治 (株)博報堂事業カンパニー事業マーケティング部長	
18:00	}	
21:00	前夜祭(自由参加)	多摩センター駅南側パルテノン大通りと交差する東西の大通りを主会場に、多摩ニュータウンの各地域の踊り手が胡弓の音のつて「風の盆」で大集合。
8月26日(日)		
18:00	}	
21:00	本祭	